FDガイド第21号

ベストティーチャーに聴く授業の工夫④

鹿児島大学 FD 委員会

【発行／2021年2月】

鹿児島大学教育学系
教授　山口　武志

私の専門は，算数・数学教育になります。教育学部では，教師を志望している学生の皆さんを対象として，小学校や中学校，高等学校における算数・数学科の授業の在り方や教材研究の方法などに関する授業を主に担当しています。授業については，現在もなお，課題を感じており，授業改善の必要性を日々認識しているところです。

拙いながらも，担当している授業では，次の諸点を特に大切にしています。

❶ 算数･数学科に関する授業観の涵養を重視すること

限られた回数の授業において，学校で指導する算数・数学科のすべての教材を取りあげることは困難です。そのため，授業では，典型的な教材に絞り，それらの教材研究や授業づくりを具体的に検討する過程を通じて，算数・数学科に関する授業観の涵養に特に配慮しています。受講生自身が，「算数・数学科の授業はどうあるべきか」を問い続け，大学における学びを通じて，算数・数学科に関する自らの授業観をもつことが最も重要であると考えています。

❷ 実践力の育成という視座から授業を工夫すること

授業では，教育実習なども考慮しながら，実践力の育成という視座から授業を工夫するように心がけています。受講生の多くが教育実習を経験していない授業の場合，教育実習を意識しつつ，「教材研究，学習指導案の作成→代表者による模擬授業→模擬授業に関する協議」といった流れを基本に授業を展開しています。こうした一連の流れにおいては，グループワークなどの活動も取り入れるようにしています。また，教材によっては，こうした一連の流れの後に，ベテラン教師の実際の授業や過去の受講生の模擬授業のビデオを視聴し，比較検討する場合もあります。「模擬授業に関する協議」の後には，私から，受講生の学習指導案に共通する改善点や，教材や授業づくりのポイントなどに関する補足説明を行います。その際，関連する算数・数学教育の理論も取りあげながら，できるだけ理論と実践の往還を図るように努めています。さらに，教材研究や学習指導案の作成などを支援するという視座から，授業によっては，次時の授業のためのワークシートを配布し，予習課題とすることもあります。そのワークシートには，参照すべき学習指導要領解説のページやテキストのページ（テキストを利用している授業の場合）を記載し，自学自習にも配慮するようにしています。なお，教員採用試験の2次試験では，模擬授業を実施する県や市も多いことから，授業によっては，採用試験の模擬授業として出題された課題を授業の中でも取りあげています。

❸ 受講生の意見を授業改善に活かすこと

大学教員になったときから，多くの授業において，受講生による「中間評価」，「最終評価」を実施し，授業改善に活かすようにしてきました。具体的には，「この授業において今後も続けたほうがよいこと」と「改善してほしいこと（授業の進め方，板書，説明の仕方，配布資料などの改善点）」を自由記述によって無記名で回答してもらっています。「中間評価」は，授業の中盤（第7回の前後）で実施し，受講生の意見をもとに，後半の授業の仕方や内容を変更することもあります。また，「最終評価」で得た受講生の意見は，次年度の授業の改善に活かすようにしています。受講生の意見には，授業に対する率直な要望や私自身が気づかなかった授業の課題をはじめ，授業改善のためのアイデアが含まれている場合もあります。私の現在の授業には，長年にわたる受講生の様々な意見が反映されていると思っています。その意味で，授業改善に関する貴重な意見を寄せてくれたこれまでの多くの受講生に対し，感謝したいと思います。そして，受講生の意見を真摯に受けとめ，授業改善を図ることの重要性をあらためて感じる次第です。

短期間でしたが，私自身，高等学校の数学科教師として勤務した経験があります。中学生のときから教師になることを夢としていた私は，教育学部において教員養成に携わっている今をとても幸せに感じています。所属する教育学部の先生方からもご助言いただきながら，未来で活躍する子どもたちの教育を担う優れた教師の養成のために，今後も，授業改善に努めてまいりたいと思います。

ベストティーチャーに聴く授業の工夫④

高等教育研究開発センター
森　裕生

1 教育の理念を持つ

私は、授業をデザインするに際に私自身が大切にしている教育の理念に基づいて行うようにしています。私の教育の理念は「学生が自分自身で学びを広げていくことを促すこと。そして、自分自身で学びを広げることができる学生を育成する」こととしています。自分自身で学びを広げていくとは、何かの授業や学びに関連する活動の後に、「次はこれをやってみよう!」「次はこの科目を受けてみよう!」「これが面白かったから将来は〇〇関連を目指してみよう!」というように、自分自身で学んだ内容を解釈し、次の活動につなげていくことを指しています。

このように教育の理念をしっかりと定めておくと、授業をデザインするときの指針となることはもちろんですが、自分自身の授業を振り返るときの指標としても機能します。今回はこの理念に基づいて実際に授業で実施している①「振り返り」を促す、②他者との学び、③学生にしっかりと寄り添うという3つの方針についてご紹介します。

2 「振り返り」を促す

「学生が自分自身で学びを広げていく」ためには、学習内容の「振り返り」を促すことは非常に重要な活動です。学生に適切な振り返りを促すことで自分自身を客観的に捉えたり、現況や不足している点などを知ったりすることができます。すなわち、振り返りを行うことは、自分自身の現在地を認識し次の活動を考えることであり、学びを広げていくための基礎的なステップでもあります。

私の全ての授業で「ミニッツペーパー」を記入してもらいます。ミニッツペーパーは、「①重要だと思ったこと、②最も疑問に思ったこと、③その他コメント」で構成しています。まず、きちんと90分間の振り返りを行ってもらいます。一方で、学生・教員双方がミニッツペーパーを書くことが目的化してしまうこともあります。それを防ぐために、丁寧なフィードバックも実践しています。2019年度までは、manabaのコースニュースを用いて、質問やコメントに答える授業だよりを発行していました(図1)。また、2020年度の遠隔授業では、学生のモチベーションを維持するためにも、提出されたミニッツペーパーに対して個別にコメントをしていました。

•manabaの「コースニュース」を用いて授業後2日以内を目安に配信
•基本構成は以下の通り

学生からの質問・コメント①
私からの回答①
学生からの質問・コメント②
私からの回答②

(図1)

3 他者との学び

学習を進めたり、振り返りを行ったりする際に「他者の視点」は非常に重要です。先生方もご存じの通り、他者の指摘や質問によって、気付きを得たり間違いに気付いたりすることができます。私の授業では、他者の視点をとりいれることができるようなデザインを行っています。

先述の「授業だより」の取り組みもその一例ですが、他にも、授業中に行った演習課題は、必ず近くの学生と共有する時間を設けたりしています。グループディスカッションというと構えてしまう学生も多いですが、まずは自分が演習課題で回答した内容を小グループで共有するところから始まるので、発言のハードルが低いことが特徴です。このように、学期の序盤は簡単なグループディスカッションから始めていき、慣れてきたところで、知識構成型ジグソー法の課題を実施したり、書きかけのレポートをピアレビューしたりする取り組みをいれるなど、学期全体を通して、他者との学びが上手くいくようにデザインをしています。これらのデザインを通して、教員から学生の一方向ではなく、学生同士の相互互恵的な学びを取り入れています。

4 学生にしっかりと寄り添う

私が授業で一緒に活動する「大学1年生」の時期は、学習そのものが苦手だったり、高校からの学びの変化に戸惑ったりする学生も多くいます。一人一人の学習の課題や悩みを踏まえたり、得意なことをより伸ばしたりしていけるような、学生に寄り添った適切なフィードバックや授業デザインを意識しています。特に私が担当している初年次セミナーは少人数クラスですし、大学生になって最初に受ける授業なので、この点を強く意識してデザインしています。論証型レポートのテーマが決まらないと悩む学生には、対話を通して興味関心を聞きながら、関連する社会問題を一緒に考えたりもします。反対に、自身の強い関心のあるテーマを選んだ学生には、専門書や英語の論文などを薦めたりもしました。

このように寄り添うためには、学生のことをよく知る必要があります。授業では、しっかりと学生の様子を観察しますし、授業後は、演習課題の回答やミニッツペーパーにしっかりと目を通して、少しでも学生のことを知ることができるように努力しています。

5 最後に

私は、高等教育研究開発センターの所属なので、主に共通教育の授業を担当しています。私が同じ学生と接するのは、最長でも1年生の1年間のみ、さらに週に1回だけしかありません。私の授業を離れても、学生自身で学びを広げていくことができるように、その方法や2年生以上になっても応用可能にするための支援を行っていきたいと考えながら授業に臨んでいます。学部に羽ばたいていった学生のみなさんの活躍を聞くことが、授業に取り組む原動力になっています。